

柴田武編

ことばの意味 2

辞書に書いてないこと

平

柴田 武 1918年名古屋市に生まれ、20歳まで同地。以後、東京。東大文学部言語学科卒。東大助手、国立国語研究所員、東京外大教授、東大教授を経て、現在、埼玉大教授。言語学・方言学。著書『日本の方言』(1958)、『言語地理学の方法』(1969)

國廣哲彌 1929年山口県宇部市に生まれ、20歳まで山口県。24歳まで東京。以後、萩市、松江市、水戸市を経て39歳から東京。東大文学部言語学科卒。現在、東大助教授。言語学・意味論。著書『構造的意味論』(1967)、『意味の諸相』(1970)

長嶋善郎 1940年長野県小諸市に生まれ、1歳から9歳まで新潟県佐渡。以後東京。上智大外国語学部英語科・東大文学部言語学科卒、東大大学院修士課程修了。現在、独協大助教授。言語学。訳書にR. ヤーコブソン『一般言語学』(共訳、1973)

山田 進 1948年東京に生まれ26歳まで同地。以後名古屋。東大文学部言語学科卒、同大学院修士課程修了。現在、名古屋工業大講師。言語学。

浅野百合子 1920年東京に生まれ、以後、東京在住。東京女子大英語専攻部卒。言語文化研究所付属東京日本語学校講師、西ドイツのボン大学東洋言語研究所講師を経て、現在、オーストリアのウィーン大学日本学研究所講師。

平凡社選書66

ことばの意味 2 辞書に書いてないこと

昭和54年 6月15日 初版第1刷発行

定 価 1300円

著 者 柴田 武・國廣哲彌
長嶋善郎・山田 進
浅野百合子

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町4番地1
郵便番号 102 振替 東京 8-29639
電話 東京 (03)-265-0451

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

©代表=柴田武 1979 Printed in Japan

不良本はお取替え致しますので小社サービス
課までお送り下さい(送料は小社負担)

平凡社選書 66

ことばの意味 2

辞書に書いてないこと

柴田 武・國廣哲彌
長嶋善郎・山田進
浅野百合子

平凡社

まえがき

ようやくここに『ことばの意味』の第二巻を世に送ることができる。

一九七六年に第一巻を出したときには、予期以上の反響があった。日刊紙がこぞって書評にとりあげ、返って来た読者カードが二千通を超えて、編集者を驚かした。今日まで七刷を重ねたのも反響の実質的な結果である。さらに、第一巻のなかの二篇——「ツツム・クルム・マク」と「アルキマワル・ブラック・ウロツク」——が国語の教科書に採用され、東京のある区役所はこの本をテキストにして「国語辞書を考える」市民講座を企画した。

こうして熱烈に歓迎された一方で、とりあげた語があまりにも少なくて利用できないという不満もあった。それは、第二巻を一日も早く出して語をふやせという要望でもあった。もっともな要望であったが、この要望にこたえるのに今日まで三年もかかってしまった。

第一巻で約束した通り、その後も、『月刊百科』に、ご、い、し、ろ、うの名で成果を発表して来たが、第一巻のときに比べると、分析と原稿作成のスピードがひどく落ちた。これは、とりあげる語がだ

んだんむずかしくなったのと、担当者のひとり山田が名古屋に赴任して、全員の会合がやや持ちにくくなったのと、新たに浅野百合子をメンバーに迎えて人数がふえたためと考えられるが、さらにあまりにも細部にとらわれた議論におちいりやすくなったためでもある。ある場合は、一回約三時間の共同分析と、次回三時間の原稿検討で仕上ったが、それはむしろまれで、時間のかかった場合には、分析を始めてから四回、すなわち正味十二時間かけたこともある。これは一見、分析がいつそう慎重になったためのようにも見えるが、それが成果に必ずしもあらわれたとは言えないと考えている。重要なことは、むしろ短時間のうちに鋭い直観がひらめき、深い洞察が行き渡って、討論が活発に展開することである。

この巻で新しく、討論の過程を書き取った速記録をつけることにしたのは、われわれの検討の実際を知ってもらいたいためである。のべ六時間の速記原稿のうち、ここには、ほんの少ししか載せられなかったが、この記録からわかることは、われわれの議論がいかに回り道をし、循環を繰り返しているかということである。決して、たちどころに結論に達しているのではない。そこから見たら、ばかげていて、苦渋に満ちているように見えるかもしれないが、われわれにとっては有意義であると同時に、至極楽しいことなみなのである。なお、談話の資料価値を落とさないために、あらかじめ速記者に頼んでおいて、発言者のことばを一部始終ありのまま再現するように努めてもらった。もちろん、速記原稿にあとから手を入れることは厳に控えた。

第一巻におけるわれわれの分析に対して、幾人かの人から共通の反問があった。まず、なぜ歴史的な意味とその変遷に関連させて分析をしないのかという問いである。われわれの立場は、第一巻にも書いたように、現代語の共時的な分析にあるから、昔どうであったとか、昔からどう変って来たかについては一応考慮の外として、現在のわれわれの意識に訴えて、現在の日本語の意味を分析している。もちろん、現代語は過去の言語につながっているのだから、最終的には歴史的変遷を無視することはできない。ここでは、現在こうだから昔もこうではなかったかという、ちょうど逆の方向で考えようとしている。現代語の分析の強みは、材料が無限にあって、われわれの直観で「言えない(非文法的な)」文をつくって、「言える(文法的な)」文との比較ができることである。材料が限られていて、「言える」文の記録しか残っていない過去の文献言語と比べて、分析ははるかに容易で、完全に近づきやすい。

現在の意味と過去の意味の関係に関する研究は、われわれの仕事の次に続くものであって、あえて両者を同時に行なわないところに共時論の立場がある。おそらく歴史的な意味変化との比較によって、われわれの現代語の意味分析も再検討を求められることがあろう。そのときこそ、日本語の意味分析についても弁証法的な発展が期待される。

もう一つ、われわれの方法に対する批判は、複数の者が討論によって分析するのは問題だということである。ひとりの直観こそ貴重で、意味の体系もこの方法によって初めて得られるのだという考

えである。同じ語の意味でも個人によって多少の違いがあるという前提に立てば、これも一理ある方法であるが、われわれがねらっているのは、現代に生きる日本人すべてに共通な意味的部分である。現代の日本人が互いに意志を通じあえるのは、手段となっている言語の意味に共通するものがあるからと考えられる。第一巻でも述べたように、担当者たちの直観は期待以上によく一致する。

検討する間に意味の個人差が分析されれば、それは原則として捨象された。それは、最初に立てた目標が『日本語基礎語辞典』のようなものをつくることにあったからである。ただし、この本に収めた分析結果のなかには、個人差について触れたものもある。それが担当者個人にとどまらないで、その他多くの人に通ずると推察されたからである。

討論のよさは、互いに気づかないことを注意し合えることである。よほどの人でなければ、自分ひとりの分析によってつねに妥当な結論を得ることはできないと思う。対象が意味という抽象物だからである。また、討論を通じて気づいたことであるが、基礎的な語の使い方についても、われわれの言語経験は意外に狭かったり、片寄っていたりする。その意味でも討論は必要であると思う。

なお、すでに第一巻のあとがきにも書いたように、討論といっても、司会者のもとに、その場で初めて分析を試みるのではなく、担当者が考えに考え抜いてまとめて来た素案を土台に検討を加えるのである。したがって、論の進め方の基本線は実質的にそれぞれの担当者のものである。

さらに、第二期からは浅野百合子をメンバーに加えたことを述べた。東京出身の女性で、言語経

験が長いという点で、われわれのグループの弱点を補うのに適任だと考えた。しかし、浅野は第二期のかなりの部分はウィーンに出張していて、共同討議に直接参加することは多くなかったが、ウィーンから航空便で意見を寄せることによって十分に貢献した。

第一巻以後われわれに加わったものには、森田良行『基礎日本語』という参考文献もある。これは、われわれの仕事の反響というよりは、おそらく長い間ためであった分析をこの機会にまとめられたものだと思うが、これは第二期のわれわれの検討にとって大いに参考になった。この巻で扱われている語については、森田の仕事を無視しては進むことができなかったといってもいい。

第一巻、第二巻はもっぱら動詞を対象にして来た。しかし、第三巻については、動詞に限らず、問題になる語はどんな語でもとりあげることにした。遠からず浅野も復帰することでもあり、グループの組織も多少変えて、すでに第三期の研究を始めている。引き続き『月刊百科』に、いろいろの名で発表することは変らない。浅野が加わった現在、ごい四郎はおかしいと言われるかもしれないが、ごいしろうの第二の意味は「語彙知ろう」であったから、これで差し支えないと思う。

今回も編集部の柴田迪子さんの尽力が大きかったが、刊行の段階で外部から木下のり子さんの助力を得た。ありがとうございました。

一九七九年四月二日

柴田 武

目次

まえがき	3
アケル・ヒラク	12
シメル・トジル・トザス	21
サガス・サグル・アサル	29
トラエル・ツカマエル	37
アツメル・ソロエル・マトメル	45
エラブ・キメル・サダメル	53
リヤクス・ハブク・ヌカス	61
*	
ミル・ナガメル・ミツメル	70
ノム・スウ・ススル	78
イウ・ハナス・シャベル・ノベル・カタル	87

ヨリカカル・モタレル・モタレカカル	189
* マ	
マス・フエル・フヤス	181
ツム・カサネル・ツミカサネル	172
タメル・タクワエル	163
タス・クワエル	156
トメル・ヤメル・ヨス・オワル(オエル)	148
モドル・カエル・ヒキカエス	140
タドル・ツタウ・ツタワル	131
トオル・トオス・ツウジル	122
ハシル・カケル	113
* オ	
オモウ・カンガエル	104
カラカウ・ヒヤカス・ヒニクル	96

スガリツク・シガミツク・カジリツク・トリツク	196
カラム・カラマル・モツレル	204
✓オオウ・カプセル	212
ツク・サス・ツツク	220
タオレル・ヒックリカエル・コロブ・コロガル	230
＊	
フクラム・フクレル	238
ホコロビル・ハチキレル・ヤブレル・ヤブケル	246
ソル・シナウ・タワム	254
＊	
ヒカル・カガヤク・テル	261
ある日の討議——タス・クワエルをめぐって	269
あとがき	302
索引	312

ことばの意味

2

——辞書に書いてないこと

アケル・ヒラク

(I) アケル

コップを高く掲げて、「乾杯！」と叫んでわれわれがしていることは、ビールを飲み干してコップをからっぽにすることである。

この動作を表わすのに、

1 a コップをアケル。

b ビールをアケル。

のどちらとも言える。コップはビールを入れた「入れ物」、ビールはコップのなかに入れた「物」であるから、この場合は、「入れ物」もその中の「物」もアケルの対象物になりうるわけである。

これに類する例はほかにもある。

2 a (お湯の入った) たらいをアケル。

b (たらいに入った)お湯をアケル。

3 a (米の)袋をアケル。

b (袋の)米をアケル。

4 a (みかん)の箱をアケル。

b (箱の)みかんをアケル。

しかし、

5 a (人の入っている)部屋をアケル。

b x (部屋に入っている)人をアケル。

のとおり、**b** のように言えない。「部屋」と「人」との関係は、「部屋に人を入れる」と言えることから考えても、一見「コップ」と「ビール」の関係に似ている。しかし、この場合、**b** のようには言えない。これに類する例に、

6 a (客の坐る)席をアケル。

b x (席に坐る)客をアケル。

7 a (故障車がふさいだ)道をアケル。

b x (道をふさいだ)故障車をアケル。

のようながある。6と7は、「場所」とその中の「物」との関係である。

いま、右に「場所」といったものと、「入れ物」といったものとをまとめて、改めて「場所」といい、それをB、その中にある、あるいは、そこにある(いる)「物」をMとすると、1～4は、BだけでなくMも対象物になりうる場合、5～7は、Bだけが対象物になりうる場合である。

Bが対象物になることは、1～4にも5～7にも共通であるが、1～4がMをも対象物にしうるのは、Bが「入れ物」で、それを動かして中の「物」(M)を外に出すことが容易だからである。

「部屋」は「入れ物」らしく見えても、それを傾けたりして、「その中にいる人」を外に出すことなどはできないのである。

ところで、アケルは次のようにも用いられる。

8 車のドアをアケル。

これも、アケルの対象物はM(ドア)で、そのMを動かしてドアのある車の入り口(B)に何も無いようにすることだと説明できる。この場合のMは、コップの中のビール(M)とは異なる。ビールはコップの内部をふさいでいるものであるが、ドアは車という「入れ物」の口をふさいでいるものである。このようなMになりうる対象物には、「引き戸・障子・幕・引き出し・箱(の蓋)、車庫のシャッター、ズボンのチャックなど」がある。

なお、次のような例は1～4と同様な説明をすることができる。

9 行^{ぎょう}をアケテ、タイプする。

10 あすの午後をアケテおこう。

11 体(手)をアケテ待つ。

これらは、「行、あすの午後、体(手)」という場所(B)をからっぽにすることである。

12 壁に穴をアケル。

これは、「お湯をわかす」と同様の表現で、「穴」は「場所」であって、壁の土をとり除いて、からっぽにしてつくった結果である。

以上から、アケルは、へ何かにふさがれている場所をからっぽにする」ということと言える。ある場所をからっぽにするためには、もちろん、そこをふさいでいる物を「完全に」とり除くことが必要である。

以上1～12のうち、8とそれ以外とは、対応する反義語も異なる。前者の反義語は「シメル」であるが、後者は「イレル・ツグ・ツメル・フサグなど」である。